

文芸研究 第一七三集 別刷
平成二十四年三月 発行

「小品」の時代のなかの吉江孤雁（下）

山崎義光

山崎義光

七 「旅から旅へ」——孤雁の紀行文

ここからは孤雁の散文を具体的に検討してみたい。とりあげるのは『旅より旅へ』（中興館書店、明治四四・七）である。この文集をとりあげるのは、ジャンルのな拘束をもった紀行文と、感想、随筆、小説、散文詩などと重なりながら収まりきらない脱ジャンルのな小品とが、「生命としての自然」のなかの「私」という世界に宇宙観において包括され、孤雁散文の特質が集約して現れているからである。

『旅より旅へ』は、全体が三章で構成されている。「夏旅」「山影」「癡人」の三章である。

梅雨時に刊行され、「独歩氏の忌月に當るので、これを此種の二冊の著書と共に、青山なる氏の墓前にさげ度いと思ふ」とのまえがきがある。そして、扉には本書の構成を説明した次の序文が付けられている（引用は全文）。

自然は、たゞその在りのまゝの姿を、吾々人間の恣な眺めに委かせてゐると思はれる時と、強いコマンドするやうな力を以て、吾々のライフの中へ無理やり割り入れて来すには

置かないと思はれる時と、それ程強くはなく、只人間と自然とがミングルして、一向差別の付かない生活をしてゐると思はれる時とある。

「夏旅」と「山影」と「癡人」及び「松林」まで、大凡三つに分けて見たのは、如上の場合の区別を、おぼろげながら付けて見たいと思つたからであつた。

吾々の主観と対境の自然との間に発する火花が一種芸術の光りとなる。吾々は飽くまで引き締めた心持で、其光りを捉へることが出来たらば、それで好いと思ふ。

ここで述べているように、全体を貫くテーマは「自然」である。

「自然」が「たゞその在りのまゝの姿を、吾々人間の恣な眺めに委せてゐると思はれる時」を記したのが、紀行文をまとめた最初の「夏旅」の章である。「山影」の章では、「私」の想念や幻想を含む小品が並ぶが、これらは「自然」が「強いコマンドするやうな力を以て、吾々のライフの中へ無理やり割り入れて来すには置かないと思はれる時」を描いたものである。「自然」と「吾々のライフ」（生活・生命）とが地続きのものであるとの認識がある。

三つめの「癡人」の章は「只人間と自然とがミングルして、一向差別の付かない生活をしてゐると思はれる時」と性格づけられている。人との交流場面を描いた小品が並ぶ。

まず、紀行文を集めた「夏旅」の章からみてみよう。

この章に集められた紀行文は、上野を出発して、猪苗代湖周辺をめぐる、磐梯山を望んで檜原湖を周遊したあと、岩越国境をわたり、新潟県の信濃川河口へいたる一連の旅の紀行文である。「三人旅」「猪苗代湖畔印象記」「檜原湖」「岩越の国境」「信濃川の河口」の五編からなる。

「三人旅」は、旅のはじめから檜原湖周遊にいたる概略を記している。このうち猪苗代湖周辺の周遊、磐梯山から檜原湖へいたるまでを独立して記したのが「猪苗代湖畔印象記」「檜原湖」の二編である。なお、磐梯山は、明治二年七月一五日に噴火（水蒸気爆発）を起こしている。岩石や土砂で村を埋め川を堰き止めて、秋元湖、小野川湖、檜原湖などの湖沼ができた。「檜原湖」は、「磐梯陰めぐり」の紀行で、噴火と地形の変化、村人の被災についての話題が、道中の記述の中に織り込まれている。そして、「三人旅」で記された旅の行程の続きにあたる、福島から新潟にいたる旅を記したのが、「岩越の国境」と「信濃川の河口」の二編である。

「三人旅」は、まず、上野駅から「N君と最一人」との三人で汽車に乗り込み、車窓から見た風景や地勢、車中で見かけた人物たちの様子が記される。郡山で岩越線に乗り換え猪苗代へ行く。そこで会津若松の病友を訪ねるN君と別れる。もう一人の同行者と猪苗代周辺で過ごし、二泊後の三日目、若松へ出て城跡をめぐる、

N君とも合流して、再び猪苗代へもどる。翌日、磐梯山の裏をめぐる檜原湖へ出て湖畔に泊まる。その翌日、山道を通って喜多方へ抜け、再度汽車で若松へ帰り、東山温泉へ行くまでが記されている。

紀行文であるから、経由した駅や地名、訪れた場所についての記述もある。しかし、場所についての解説、紹介的な記述ではない。現在形の文末表現が多用され、旅する現在に視座がおかれて、その水準から離れることがほとんどない。旅先で出会った人についての記述もあるが、省筆である。旅をしている現在を離れた視座から場所を客体化した記述や、同行したり出会った人との関係よりも、より丁寧に記述されるのは、旅する者がそこで体感する自然の描写である。「猪苗代湖畔印象記」と「檜原湖」にその傾向が強い。

① 「もう直き長浜だのし」と老水夫の音がする。二人はひょっこり頭をあげて見た。鮮やかな色彩の緑の丘が眼前に近く、その下の砂地に波がまろんでゐる。目醒めるばかりに鮮やかな景色だ。「翁島は」と訊くと、少しく左手の方を指して教へる。島の上には団々として淡緑や濃藍やの青葉若葉が球のやうにかたまり合ひ、その縁を繞つて青蘆が一面に叢生してゐる。島と岸の出鼻との間に、水は幾条に分れてめぐりめぐつてゐる。飯豊山の雄姿は此眼前の景色に隠れてしまつた。長浜へ着いた。振返ると、青い波がしき立ちしき立ち、白い頭を昂げて砂地に押し寄せせる。日がぎら／＼とりつけて、眩ひがさうだ。砂地から左手の丘へ登る。草の緑が濃く、

路は白く、登るに従つて湖の大観が次第に一陣に収められる。湖を縁取つて緑葉がこんもり茂つてゐる。其緑葉の上を白雲がまろばるやうにして湖の上まで漲つて来る。雪白な其雲、あくまで深碧な水の色、日は上から直射すれども曇くはない。澄んだ光線は空中に瀰漫して、如何なる微細な草の葉の先からでも、水際の小砂からでも、波の飛沫からでも、旅人の帽の肩袖からでも、其光を反射させずには置かないのである。丘の一角へ出で、緑の草を藉いて、二人は湖に眺め入つた。目を瞑り、耳を立て、胸は自らと前へ張り、飽までも此美しい眺めを五体の中へ吸ひ入れずには居られない。

〔猪苗代湖畔印象記、傍線引用者〕

② 東の岸が稍々平かに開いて櫟林が低く続いてゐる向うに煙が二條三條あがる、何かと訊くと、猪苗代の方から来て開墾地を作つてゐる人々の村だと教える。その村のある辺から檜原湖の水は一葦の水路を作つて、小野川湖の方へ続いてゐるのである。此の東岸にはまだ早稲澤といふ村が出来てゐる。

夕焼の最後の光をこゝに集めたやうな、一団の大きな紅の雲が、東岸の林の上に高く浮んでゐる。今迄はさうとも気が付かなかつたが、その下へ舟が来ると、ぱつと湖上が急に明るくなつて、互の顔も明るくなるやうな気がする。雲は上になる程美しく紅く燃えて、下は薄く鼠色にぼけてゐる。最う此雲の色が消えたがさい後、今日の日は暮れ果て、しまふ、今日といふ日の名残を集めた色だ。

〔檜原湖〕

しる例外的で、旅に出た動機や普段の生活におけるあれこれ、人間関係、過去の想起、未来への意思といった私的な脈絡を交えることが多くない。それよりも、その場にいる、匿名ながら固有の身体性の次元に、記述を限定している。さらに、「文章」といっても、ここには格調高い、あるいは定型的な表現、古典に準拠した表現は用いられない。徹底して、その場にいる視座の範囲を逸脱せず、固有の視点に限定することに意をはらつた平明な表現が用いられている。

別の見方をすれば、これらの紀行文には、他者との出会いもない。旅する身体に求心化されて囑目の風景が描写されるのと同様に、旅先で出会つた見知らぬ他人の姿や話が挿入され描写されることはあつても、出会つた人や自然が、理解を超えた異様さ、他者性をもって露出することもあまりない。

先に言及した「今の紀行文家（合評）」『早稲田文学』明治四〇・十一で孤雁は、小島烏水の紀行文について「自然対人間の関係に眼を着けてゐる所」を好意的に評価していた。烏水は、新しい紀行文は「漢文直訳体」では「靈活なる自然を叙するに足らない」とし、「写生に重きを置かざる可からず」と考へていた（『紀行文と写生』、『烏水文集』本郷書店、明治三九・四。酷評された合評に対しても翌月『紀行文小論』『早稲田文学』明治四〇・十二）を寄せ、新しい紀行文は実用や遊戯ではなく「自然及び人生の両面を、自然の姿に透写して見るものを言ふやうになりはしまひか」と述べ、孤雁の名もあげて期待を寄せていた。孤雁は、明治四二年に『緑雲』を出版する際、烏水の助力を得ていとう。紀行文

いずれの引用も、描写は現在形を基調とし、眼前に今こゝで見ているかのような描写である。ただし、①の描写は一人称とも言い切れない。「二人は」という主語が表れ、「二人」が感得していることの差異は前景化しない。描写の基調は、その場の現在に身をおくという意味では内在的で固有ながら、匿名的な身体性の次元で描写されている。旅する者個人の私的な生活背景の想起や思いがほとんど記述されないのも一つの特徴である。

旅の現在地、行程、囑目の風景、土地の伝説など、土地の固有性に関する記述も含まれる。だが、旅をしている者の視座を離れて、事後的、外在的な視座から、風景を地理学博物学的に、あるいは審美的に客体化することはあまりない。土地の記述がなされる場合も、旅先で出会つた船頭や案内者などから聞いた話として挿入される。①では「老水夫」、②では、引用箇所には表れないが「船頭」である。

先に言及した「紀行文の研究」『文章世界』明治四四・十の評では、「主観的価値より客観的価値に向つて進まんとしつゝ、あるやうなもので、これは事実そのものよりも感興と文章とを主としてゐる」と評されていた。しかし、これには注釈がある。というのも、旅する現在に視座がおかれるという意味では旅する身体性の「事実そのもの」には忠実であるといふべきで、遠ざけられているのは、むしろ旅で訪れた場所についての事前事後の知識といふべきであろう。また、「感興」といつても、旅する者の感想や思いを記すことには消極的である。「信濃河の河口」では、信州で育つた者の信濃川に対する特有の感慨が記されている。が、それはむ

の集成『旅路』（中興館書店、大正四・六）には「此書を小島烏水氏に呈す」と献辞を記し、「序」でも謝辞を記している。そのような親近と相互理解があつたのはたしかである。だが、書かれた紀行文は烏水とは異質である。自然を見出す文脈も、自然観も、表現意図も異なる。烏水は、江戸の風景画に強く惹かれ、中世近世の紀行文に親しみ、志賀重昂『日本風景論』（政教社、明治二七・十）に感化されて紀行文を書き始め、登山を推進する山岳会の創設（明治三八年）にかかわっている。山への興味は多角的で、審美的、文化的、地理学博物学的な興味をもつ（『日本山水論』隆文館、明治三八・七など）。それに対して、孤雁は、欧米におけるツルゲーネフやワーズワース、ソローといった一九世紀の自然・田園志向、日本におけるその受容の系譜からの感化が基調となつて³⁾いる。孤雁は紀行文から、絵画や文章の伝統的スタイル、自然についての科学的、あるいは文化史的記述を積極的に遠ざけているようにみえる。日本の国土の特質、美点を「山水」に見いだし称揚する姿勢も希薄である。そうした文化的系譜は、「情性」や「慣性」にとらわれない自然との接触を旅に求め、その局面をこそ描出する意図をもつた孤雁にとって、遠ざけるべき事柄に属する。

『旅路』の「序」では次のように記している。「旅を求むる心は新らしき国を求むる心である。新らしき境地に於て新らしき自己を見いだしたい要求である。」それに対して、「常に同じ境地に同じ自然に取り巻かれて生活してゐる時、吾々の心は常に同じ現象を捉ふるに慣れて、刻々の不可思議を失ふとする情性を慣養せしめられるのである。」旅はこの「情性」を破るといふ。「旅の心は

幾重も取り巻くしうねき慣性を破つて、清新な姿に生きて見たい要求に「あり、我が生の深き姿をその自然と接する時に現出しせしめん要求」によるとする。孤雁にとって、土地の文化史的記述や旅案内、地理学博物学的興味にもとづく記述は旅の目的に沿わない事柄にあたるといえよう。

八 「旅から旅へ」——孤雁の小品

ここまで、「旅から旅へ」の「夏旅」の章を対象に、既成ジャンルとしての紀行文に属する孤雁の散文をみてきた。だが、孤雁散文の特質は、旅の記述という枠組みの拘束をもたない「小品」においてこそよく現れる。孤雁の表現意識は、「生命としての自然」というべき自然観から導かれている。ここでは、まず孤雁の小品観とその背景にある自然観、世界宇宙観をふまえ、そのうえで『旅から旅へ』所載の小品をとりあげて、その特質を明らかにしたい。

孤雁は、『小品文苑』（新潮社、明治四二・一二）所載の「小品文を書く態度」のなかで、「小品」について、「韻文」とも「小説」ともつかない散文との理解を記している。「小品文はつまり、一方からは韻文の崩れたやうな形とも見る事が出来、また一方からは、広い意味でいふ小説の一部分とも見る事が出来る」。そして、小品固有の意義を、「短かくてもその人の感情なり、思想なりのエッセンスを直ちに示す事の出来る点に於て、小品文は詩よりも小説よりも或は一層有効な形ではなからうかと思はれる」と述べる。それゆえ、「書く態度」についても、「自分の心の鏡がすつかり澄ん

で居る所へ、凡ての現象を映じて見るといふ態度が必要である」という。そして、「少しでも在来の習俗的な考へなぞに累はされずに、飽く迄も自己に忠実に、同時にまた、自分の精神を集中して、目の前に起つて来る事を観照して、その纏つた所を描き出して見ると言ふ事より外には仕方のないものである」とも述べる。「在来の習俗的な考へ」を排除し、「自己に忠実に」、「目の前に起つて来る事を観照」する。それを書くことこそが小品の要諦であるとする。

「自分の心の鏡がすつかり澄んで居る所へ、凡ての現象を映じて見るといふ態度」は、述べたやうな孤雁の紀行文の性格にもよくあてはまる。孤雁の書く「小品」は、紀行文同様、(自然)描写を多く含む。だが、紀行文が「目の前に起つて来る事を観照」することに徹し、匿名的な固有の身体性において旅を微細に記述していたのに対し、小品では、紀行文にあったジャンルの拘束から解放され、自由に「私」の「感情なり、思想なりのエッセンス」が語られる。そこで追及されるのは、「目の前に起つて来る事を観照して」記述することをさらに進めて、そのとき感じ考えていることまでをも「自己に忠実に」記述することである。そのとき、場合によっては、出来事の事実性もまた溶解して、空想から幻想性を帯びた想念までを含むことになる。

ここで最初の作品集「緑雲」から「草叢」をとりあげてみたい。この小品では、「自然」「生命」観も示されるからである。まず、冒頭を引用してみよう。

前には、草の小径が幾條とも無く縦横に走つてゐる。今此小

径の一つ一つを越ふて行つたならば、果して如何様な所へ出られるだらうと、別に不思議でもない事を、何か新しい事のやうに思つて見た。

友人と行った「教会」からの帰りに一人で「草叢」のなかにきた「私」が、「何のために生きて居る?」という問いをめぐつて物思いにふけるその内実が語られる。今ここにいる「私」とこの世界に生きていることの意味をめぐつて、「習慣の怖ろしい力さへ脱する事が出来れば人は自由である」と考ふる日常の想念が語られていく。それに対して、「人生の至宝」の時は次のように示される。

或朝早く眼が覚めると、窓ガラスから淡い朝の雲が見えて、近くの森にひんからと鳥が鳴いてゐた。そして、昨夜窓枠の上へ出して置いた撫子の薫りがほのかに朝風に匂つて来た。此時自分の心は真に静かであつた。そして真に空虚であつた。何の事も浮んで来ない。無念無想。鳥の歌と花の香の中に初めて地上に生れ来たもの、やうに思はれた。此時、此刹那、過去とか、未来とか、現在とか、時を区画する、姿などは思ふ事が出来ない。自分の心は只十年前も亦此儘であつた。百年後も斯くあらう、自分は今永劫の境にあるとのやうに思はれて来た。幼児の姿も目の當りに見えて来るし、百里隔た人も今眼前に現はれて来る——斯様な刹那こそ真に人生の至宝ではあるまいか。

ここで「人生の至宝」とされている「刹那」は、「永劫の境」であるとされる。無限遠の超越論的な視座からとらえた「人生の至宝」の「刹那」を想定しつつ、それを阻む人間的なあらゆる作為

や觀念から脱し、自然のなかに没入しようとする事が語られる。「永劫の境」から人を遠ざけるのが「習俗」である。「脱れやう、脱しやうと走つても、潮のやうに寄せて来る「習俗」の力に没せられて、思に委かせない。果ては自分で何の意とも知らず、ひたすら変化を求め、境遇の移転をもがき願つてゐるのみである。「習慣」や「習俗」にとらわれることから脱却しようとする一方、人も自然も刻々と変化してやまず、結局、自らとどまることなく「変化を求め、境遇の移転をもがき願」うことになる。「生きたい」「動きたい」此等の要求は直ちに大自由を得たいと云ふ声ではないか。幾千万年の歴史が何になる。真に感じた一刹那こそ生命ではないか。人は此刹那を求めて終生走つてゐる」。

冒頭は、今草叢の中へ来て「いる」の身体に定位されている。「教会」からの帰り「小径が幾條とも無く縦横に走る様を眺めて」「草叢」に座る設定は、宗教(教会)へ親近しながら、その手前で「生命」としての自然(草叢)と自己の關係に思索をめぐらす生命主義的発想に相即している。そして、自然のなかの自分、「永劫の境」と生をめぐる日常のなかの思考が展開される。世界宇宙の要素として内在し、そのなかの偶有的で孤独な「私」が、今「真に感じた一刹那」の感覚と想念において、「永劫の境」としての「生命」へ帰一することを希求する。逆に言えば、人間關係や歴史・社会的に規定されてある「私」は、脱却すべきあり方としてとらえられている。

孤雁の「生命としての自然」という認識は、人間性の自然としての欲望や自意識、そのことの暴露的表象によるスキャンダリズ

ムにおいて人間性の表現に向かう意味での自然主義とは、そもそも異質であることは明らかである。孤雁は「自然」を、宇宙にまでひろがる「生命」の現象体としてとらえる。それには人間も含まれる。自然と人間とは「生命」であることにおいて通底しているのである。

渡欧前に出された文集『愛と芸術』（窪川書店、大正五・一）所収の「生命のリズム」では、次のように述べている。

個性を大自然の前に開放して、宇宙と直接の關係に立たしめ、それと溶合し得る時に、初めて生命の純一な流動が起る。私は芸術の根源を、先づこの生命の自然の状態に帰せしめて、其処から生ずるリズムの表現に技巧を認めたいと思ふ。生命そのものの本然の姿をよそにして、芸術に象徴を求めることは至難のことである。

ここで述べるように、「宇宙」との「溶合」による「生命の純一な流動」の「リズム」、その表現としての芸術というのが、究極的な理想型である。こうした自然観は、神秘思想に接近することにもなる。メーテルリンクやフランシス・グリーアスンなどに言及しながら論じた評論「純一生活」（『早稲田文学』大正二・八）では、こう述べる。「知力の拘束を受けず、通俗道德の原則に支配せられず、自然性と單純性を生命」とする「本能」とその「一層純化せられたる直覚」をもって生活すること、人間が大自然と同一な呼吸をすることが出来る。」

孤雁の小品もこうした自然観にもとづいている。小品集『青空』（中興館書店、大正元・十）の「序」では、こう記している。「自

然が深い静けさを我々の胸に植ゑつけて、明かな自覚を呼び醒まし、心の底の強い流動を意識せしめる時と、我々の情緒の流が自然の中に溶け込んで、伸びやかな緩やかな、自在な気分を味はしめる時とがある。」「この直接の経験を、形に表はして見たいといふ要求」にしたがって書いたという。また、現代小品叢書の一冊『砂丘』（忠誠堂、大正二・七）の序文でも、こう記している。「自然は時によつて人を苦しめ、圧迫し、命令し、窮迫せしめる。けれど私達が自然の心を心とし、自然の呼吸を呼吸し、自然の気分を気分とし、自然の生命を生命とする時、私達は自由な流動の生活をする事が出来る。自由と流動とは私達の生命に眞の姿を與へてくれる。」。人間の審美的な観点から客体化され、文化として成立してしまつた自然ではなく、「生命」をもち、「私達の生命に眞の姿を與へてくれる」「自然」である。

孤雁の小品は、自然との同一化を理念的な極北としながら、しかし、写実的な描写にもとづき多様性を示す。いわゆる、美しい風景を発見し描写することにとどまらない。生活のなかで接し感覚する庭の木であれ、山であれ、園に響く音や声であれ、見え、聞こえ、感覚するものすべてを「生命」の現象ととらえる。それらは、得体の知れない幻視や異和、圧迫として感受されることもある。それらを、微細に描写し、触発された想念を書くことを通じて、「生命」の流動が表現されるといえる。

以上のような、孤雁の「自然」観と散文表現への意識は、『旅より旅へ』所載の小品にも認めることができる。

紀行文を集めた「夏旅」の章に続き、小品を集めた「山影」「癡て瓶の肩の所から斜めに長く走つてゐる」のを見つめる。見ていると、その傷は「なくてはならない傷口のやう」に思われてくる。「光が射すやうな気がする。黒い光が其傷口から射すやうな気がする。破れ目の両端がぶる／＼震えて、花瓶全体が一種の音響を立て、うなり出し、其うなり声が室中にみちて、破れ目が相方打ち合ひさうになるかと思はれる」。そう思うと、「私はそれから一人で、其室へは入るのが怖ろしく」なる。「一人では入つて来て、其花瓶が不意に此方に向けて、其傷口を自分の方へ向けたら如何しよう。そして怖しい響を立てたら如何しよう」と思うやうになる。

また、「荷車」でも、家の軒下に止めてあつて動かしていないはずの荷車が動き出す空想にかられ、不安になることを描いている。自然や生きもののみならず、こうした物にも、得体の知れないへ生へのさわめきを感じようすが描かれる。このほか、「不図空中に大きな円形の軌道の一部分が見えて来る」とはじまる「鉄軌」。「空中で無数の鉄輪と鉄輪とが縫れ合つて怪しい響を立てるのを聞いた。いや私は實際それを目撃した。」とはじまる「鉄輪」などが続く。

「黒影」も、得体の知れない影を幻視することを描く。「私の立つてゐる前に不図黒い者が見えて来た。全身真黒で、口唇が長く、眼がくぼんで二つの点のやうだ。」「町の中」で見かけて逃げ出し、「とある角」で消えてしまふ。「ほつと」息ついて、草の上へ腰を卸して周囲を眺め、草鞋や竹の皮が捨てられているのを見る。「握飯の喰ひかけが草の中に白く見えてゐる、と思ふと、其の辺の土

人」の二章が配されている。先に引用した序文では「山影」の章を、「自然」が「強いコマンドするやうな力を以て、吾々のライフの中へ無理やり割り入れて来ずには置かないと思はれる時」を記したと性格づけていた。

この章には、「山影」「花瓶」「荷車」「鉄軌」「鉄輪」「黒影」「泥路」「空椅子」「砂塵」「雀」「霧」「草の実」「セイヌ河畔」「若葉の夜の森」が収められている。先に言及した「小品の研究」（『文章世界』明治四四・十）の評で言及されているのは、このうちの「草の実」「若葉の夜の森」の二編である。日常のなかで接し、想起された山、木々、夜の闇や霧のなから聞こえてくる音や声、砂塵、生きもの、あるいは、花瓶、荷車、風景画。また、想像や夢、幻視としてあらわれる、黒い影、鉄軌、鉄輪、空椅子など、そうした身の周りで接する物・事から触発された想念、場合によっては、その想念が空想を呼び累進していく様を描いた小品群である。人との関わりは多くなく背景化されている。それらの物・事は、私への身において生成する様相のままに、それにまつわる想念とともに扱えられる。生命のうごめき、さわめきのようなものとして描出されると言つてよい。したがって、一方で、山や木々、物の様子が微細に描写されるが、他方では、不気味さをともなつたものや幻視が幻想的に書かれることにもなる。

たとえば、「花瓶」をとりあげてみよう。「私の家に昔時から伝はつてゐるものだといはれ、長く床の間に置かれた「大きな唐金の花瓶」を、あるとき掃除のために動かしてみると、「今迄で床の間の壁に面してゐた方には、大きな縦の傷が、深い広い口を開い

が少しむら／＼動き出した。何だらう、次第に動く。見る／＼土が高くなつて、出て来た。例の黒い姿」。杜のなかへ逃げ込むと「黒い法師」は追いかけてこない。

「空椅子」も、学校でいつもなぜか誰も座らない椅子を描いた。これらは、幻視が累進して一種の不気味さと幻想味を帯びた小品である。孤雁のいう「自然」とは、森羅万象に遍満する「生命」の現象の意に近づいている。

その他、過半を占めるのは、「私」という〈身〉において自然や人声や生きものなどと接した感興や想念を描出したものである。

ここでいう〈身〉とは、視覚に特化した「視点」、主観/客観といった区別を前提とせず、諸々の事態が〈そこ〉において現象する地平を構成する場を指す。その意味で、これらに特徴的なのは、「私」という〈身〉の界面で生じた出来事の描写ともいうべき事態である。

山の姿を想起することで「心が平かになる」という心境を語る「山影」。雨後の園の中の泥路を一人歩きながら「水の中に浸つて、共に動いてゐる事が、どんなに愉快であるかわからない」という感興が語られる「泥路」。「人家の背後」から吹き寄せてくる砂塵の戯れを描写する「砂塵」。夕暮れ時、家の中から窓を通して見える銀杏樹のあたりで「チア、チア」と鳴き、羽音をさせる一羽の雀を見つけ、その「小さな漂浪者」の姿から、「国を飛び出して」東京のあちこちを転々と移り住んできた「自分の身の上」を思う「雀」。霧に覆われる郊外の村を散策しているうちに、その霧のなから親族に借金を申し込み断られる何者かの会話を、聞くともなしに

九 おわりに

鈴木貞美は、明治から大正期にかけて、「生命」をコンセプトとした広汎で多様な言説のひろがりがあったことを大正生命主義と呼んだ。超越的な「神」を原理にすえた宗教、「物質」を一切の根源として認識する近代自然科学に対して、「生命主義は、宗教でも自然科学でもない、いわば人間の思考の第三極にあたる」と概括している。ただし、「生命」は排他的概念ではなく、その概念が包み込む大きさによってさまざまな傾向をほらんだ思潮になりえたのであるがゆえに、生命主義的科學、宗教的生命主義などの多様性をも許容する³³。こうした思潮が勃興するなかで、大正初めに、孤雁の周辺、島村抱月、片上伸、相馬御風、白鳥省吾など、「自然主義」を論じた早稲田系の文学者たちが、雑誌『太陽』や『早稲田文学』を舞台に多くの評論を書いていることを指摘している。そのなかに、吉江孤雁「生命の力」(『早稲田文学』大正三・三)も含まれる。孤雁もまた大正生命主義の一支流であるとみることもできる。述べてきたように、孤雁は、生命としての自然を主な対境とし、「私」という〈身〉において現象する万象に「生命」の息づきを感じて、それを描出しようとする散文を残した。自然から想念にいたるまでの微細な描写は、いわば生きて動いている「生命」のさわめきを言葉にすることである。そうした描写を基調とすることに孤雁散文の特質を見出せるだろう。

孤雁の紀行文は、自然描写に偏する点で、明治期の諸々の紀行文とも異質であった。山岳紀行文をものした小島烏水とも近接したが、日本の「山水」を文化の根元として意識づけ、山岳を対象

聞き、去って行く男の足音についていく「霧」。授業におくれまいと急いで草のなかを歩いてきたために、ふとみると草の実が二つ三つについているのを見つけ、授業の題材となっているフランス革命のことから、人間の「レポリューション」のようなことが植物の世界にもあること、その実から蔓が伸びてくる「自然の力」の空想に駆られる「草の実」。若葉の季節に夜の森から聞こえるさわめきを描写した「若葉の夜の森」。これらの諸編は「主観と対境の自然との間に発する火花」(前掲「旅より旅へ」序文)を本書の中でもっともよく多様に描いたものであろう。

三つめの「癡人」と題された章は、「それ程強くはなく、只人間と自然とがミングルして、一向差別の付かない生活をしてゐると思はれる時」を描いたものを集めた位置づけられている。この章には、人との接触が含まれる散文が収められている。電車で乗り合わせた日露戦役の虜兵たちの様子を描いた「癡人」。五ヶ月の乳児と留守番をしている私が、おとなしいかと思うと泣き、なぜ泣くのかもわからない乳児の守りに途方に暮れる「新緑」。武蔵野を走る汽車の音の響きもたらす感興から、思い出される少年の日のこと、信濃の山峡を走る汽車の記憶、夜の汽笛に感応して吠える犬を描出する「汽車の響」。旅先で知り合った人々と流の見物を描いた「二瀑布」。気候の変化によって、「頭の工合が悪くて臥て居る」「僕」からA君あての書簡形式の「病」。旅先の松の森で出会った人や風景の描写からなる「松林」である。

化する志向を烏水がもつとは異質だった。孤雁は、場所の固有性を客観的に表象することではなく、あくまで自然と「私」との「溶合」(前掲「生命のリズム」)の局面に主眼がある。

また、小品においては、「小品」隆盛を牽引した水野葉舟もそうであったように、文化的伝統や慣習の表現を脱することを志向した。孤雁は、感じ考える「私」という〈身〉の界面で生じた出来事や想念の描出を通して「生命の純一な情動」を表現することを志向した。あらゆる現象は、「生命」をやどした何かの現象としてとらえられるのである。

〈身〉の界面で生じた出来事の描出は、一方で、「目の前に起つて来る事を観照」した微細で克明な対象の写実として表現される。だが他方で、「私」の感じ考えることにも「自己に忠実に」記述するとき、物・事に触発されつつ夢幻的幻想的な現象としても描出される。その双方が「生命」の現象として表裏の関係で接する。『旅より旅へ』は、既成ジャンルとしての紀行文と、脱ジャンルのな小品とを連続して配列し、「生命としての自然」という世界宇宙観において包括している。孤雁散文の特質を集約して示した作品集であるといえよう。

こうした孤雁の自然観と散文は、欧米露の文学に触発されており、「自然」は近代化(西洋化)した眼差しによって見出されている。都市化、産業化していく社会の動向と相関して、それゆえに、「自然」に憧憬、調和、救いの場を見出す。孤雁は、そうした事情をロシアの農村と都市の関係から論じてもいた。(『自然の誘惑』、『純一生活』早稲田文学社、大正四・四)。フランス留学後の

文学者・吉江喬松の研究・評論活動については本論の範囲を超えている。だが、孤雁の生命主義的自然観の展開、影響圏、可能性に若干触れておきたい。吉江は、第一次大戦中のパリから南仏に避難しているとき、小牧近江に誘われて詩人ミストラルの家をたずね、プロヴァンス文芸復興運動、「地方主義文学」（郷土主義）に接する。帰国後、小牧とともにフィリップ講演会を行い、農民政芸研究会（のち農民政芸会）が発足した。早稲田大学での教育なども通じて、フランスの農民政芸、地方文学を紹介するが、その影響範囲は思いのほか広いことが明らかにされている。孤雁は、『獵人日記』を紹介する文章のなかで、帝政ロシア時代の「ニコラス皇帝も此を読んで『黒奴解放』の動機』をえたと記していた（『ツルゲーネフ略伝』、『ツルゲーネフ短篇集』内外出版協会、明治四一・四二）。農民政芸会を見出す眼差しはここに懐胎していた。農民政芸会は、大正末から昭和初期のマルクス主義、プロレタリア文学運動に接近するが、それとは一線を画しながらも離合集散を繰り返して雑誌『農民』を発行する。他方で、フランス南方文学としてのプロヴァンス文芸復興運動が吉江を介して台湾在住日本人による郷土主義的文学論にも波及しているという。孤雁の自然観の帰趨は、宗教と科学、社会階級論、都市・中央と地方、民族・国家と国際化といった二〇世紀前半の近代社会が抱え噴出した諸問題の脈絡のなかで隘路に陥っていったと言えるかもしれない。しかし、そうした危機とも接する孤雁の自然観、自然描写を基調とした散文は、近年の環境批評の文脈からみれば、日本におけるネイチャーライティング⁽¹⁶⁾としてみることも可能であろう。

をあげている。孤雁には現実の確かさを逸脱し、幻想性をおびた小品があった。水野葉舟は『遠野物語』の機縁となる佐々木喜善を柳田国男に紹介した人物として知られ、水野自身も同じ題材を『遠野物語』に先だって発表している。あるいは、泉鏡花にも「小品」集があり、小品文の選者をするなど、怪談や幻想小説との近接があった。近年、内田百閒と志賀直哉との近接も指摘されている。百閒と関連づけられる漱石も志賀も「小品」の時代と有縁な場にあったことを踏まえたとき、それほど奇異なことでもないと考えられる。

「小品」は、それぞれささやかな散文で、作品としての独立性も弱く、その多くは現在読まれることが少ない。しかし、明治から昭和にかけての日本の近代文学にとって、この時代の作家たちの文学観の形成、様式的な影響など、支流の多い地下水脈的な系譜をなしていると考えられる。

注

- (1) 根津憲三・櫻井成夫・日夏耿之介纂修『吉江喬松年譜』（吉江喬松全集 第六巻）白水社、一九四一・一二
- (2) 近藤重行『小島烏水 山の風流使者伝』（創文社、一九七八・一）を参照。「烏水の生涯にわたる一貫した旅行趣味ないし山岳湯仰のころの生成過程には、少年時代から読んでいた頼山陽や斎藤拙堂の漢文紀行、貝原益軒、沢元愷の文章、あるいはまた中世の紀行文、同時代では幸田露伴、遅塚随水らの紀行文学に負うところが大きい、浮世絵風景画や歴史地理の書物をおして東海道や

最後に、「小品」をその後との関連でとらえておきたい。本稿では、吉江孤雁の散文と理念にしたがって考究してきたが、「小品」は多様で広汎なひろがりをもった。そもそも「小品」は難駁な散文を指す呼び名だった。明治三〇年代後半から投稿記事の形式として「小品文」が隆盛し、明治四〇年代には文士らによる小品集が現れる。こうして「小品」という枠組みは、明治四〇年前後から大正期にかけ、一瞬盛り上がった波頭として、脱ジャンルの自由な表現を許容しながら、文芸性をになったカテゴリーとして認知され定着した。「小品」という呼び名の命脈はそう長くはないが、ジャンルに帰属させにくく、作品としての独立性も認定しにくい性質をおびた「小品」的散文群は「文学」という領域の伏流となったといえよう。同時代には、幼少年期を回想する「追憶文学」が流行する。なかでも北原白秋「思ひ出」（東雲堂、明治四四・六）は高村光太郎が「異彩を放つ」た追憶文学であると評した。この序文「わが生ひ立ち」は、のちに『白秋小品』（阿蘭陀書房、大正五・十）に収められる。白秋は詩とともに多く「小品」を書いている。雑誌『白樺』にも、大正はじめに「小品」という呼び名が散見される。そうしたなかに志賀直哉「小品五つ」（『白樺』大正六・七）もかぞえられる。そして、木保知史が孤雁の「小品死」（『緑雲』所収）との類似を指摘するように、「城の崎にて」（『白樺』大正六・五）もまた「小品」と呼びうる性質を分有している。芥川龍之介は、谷崎潤一郎との話の筋論争でも知られる『文芸的な余りに文芸的な』（『改造』昭和二・四一八）の二十八 国木田独歩⁽¹⁷⁾で、『武蔵野』を継承しながら埋もれた「吉江氏の小品集」

- 木曾街道に想いをはせていたこと、志賀重昂の『日本風景論』から「江山洵美是吾郷」（大槻盤溪）という国土への愛を学び、さらに重昂徳富蘇峰の紹介を通じてジョン・ラスキンを知り、「近代画家論」に傾倒したことなど、さまざまな要因があげられるが、烏水のおさなころを刺激した小学校時代の二人の友の名（引用者注・久保天随と沢田牛麿）を逸することはできない。（五一頁）
- (3) 孤雁は「小品文を書く態度」（『小品文範』）のなかで、「小品文」の模範となる文章として次のものをあげている。徳富蘇峰「自然と人生」、国木田独歩の『武蔵野』ほか散文、中澤臨川『藝華集』、水野葉舟『あららぎ』『響』、窪田空穂、相馬御風の散文、ツルゲーネフ『散文詩』。そして、ソローの「森林生活をして居る間の幾多のスケッチ」、ワーズワースの「散文集」を「面白い」としている。ソロー『ウォールデン』、森林生活』、ワーズワース『湖水地方案内』などを指すかと思われるが、いずれも、いわゆるネイチャーライティングの代表的著作である。なお、孤雁はこのころ、ソロー『ウォールデン』、森林生活』の部分訳「森の響」を『早稲田文学』（明治四二・八）に発表している。
 - (4) 窪田空穂「わが文学体験」（『窪田空穂全集第六巻』角川書店、一九六五・六、引用は岩波文庫、一九九九・三）「八 学友と詞友」によれば、水野葉舟に誘われて行った植村正久の教会であると思われる。
 - (5) 鈴木貞美『生命』で読む日本近代』（NHKブックス、一九九六・二）三三―三四頁
 - (6) 鈴木前掲書（5）二四―二八頁、吉田精二『自然主義の研究 下巻』（東京堂、一九五八・一、五二―五三頁）は、大正三年二月「早

- 稲田文学』所載の評論「吉江孤雁」「生命の力」、稲毛祖風「生の激流」、相馬御風「本当の自分に帰る時」、片上伸「思想の力」を挙げながら、白樺派の登場とともに、「殆ど全く在来の主張と百八十度の回転を終へ」と位置づけた。しかし、孤雁について言えば、当初から主観的に扱えられる現象を「生命」として見出す発想をもつ。自我意識よりも、人間もまた「生命」として自然の一部であるという認識をもっていった。そこには「百八十度の回転」はないというべきだろう。「生命の力」ではこう述べる。「言葉は大きいが、大宇宙の前に開放せられたる自分を具手すといふ事があり得るとすれば、それは、宇宙といふものと自分との対比して、自分の小さく、を感じるといふのではなくして、その宇宙そのものの呼吸が直ちに自分の呼吸であり、自分は直ちに自己の表現であるといふに感ずる事である」。
- (7) プロヴァンスの詩人ミストラルと近代南仏文学の日本への紹介については、石塚出穂「あやめ咲く野の農民詩人——一九二〇年代の日本と詩人ミストラル」、『仏語仏文学研究』二七号、二〇〇三・五)。
- (8) 高橋春雄「解説」(『農民』解説・総目次・索引) 不二出版、一九九〇・十)
- (9) 吉江の南仏プロヴァンスの文学復興運動、「地方主義文学」の紹介が、日本の南方としての台湾の「郷土主義」につながることに ついて、橋本恭子「在台日本人の郷土主義——島田謹二と西川満の目指したもの——」、『日本台湾学』九号、二〇〇七・五) が論じている。
- (10) 野田研一『交感と表象 ネイチャーライティングとは何か』(松
- 柏社、二〇〇三・六)
- (11) 高村光太郎「北原白秋の『思ひ出』」、『文章世界』明治四四・九。「追憶文学」としての『思ひ出』については、中野友子「北原白秋『思ひ出』への接近——『追憶文学』を視点として——」、『岩大語文』第3号、一九九五・六) が論じている。
- (12) 木俣知史は、「小品文学の世界」(木俣知史編著『明治大正小品選』おうふう、二〇〇六・四)で、「死」には、自然の中に現れてくる死についての追想と思索がつけられているが、私たちは、志賀直哉の「城崎にて」を想起してもよいかもしれない。小品と心境小説には、連続性が想定できると見なすことも可能なのである(一七五頁)と指摘している。
- (13) 横山茂雄「怪談の位相」(横山茂雄編『遠野物語の周辺』国書刊行会、二〇〇一・十一)
- (14) 野口哲也『鏡花小品』論——脱ジャンルのテクストの様式——(『専門教育大学研究紀要』二〇一一)
- (15) 坂口周「デジャヴのフィールド——志賀直哉「イズク川」から内田百閒へ——」、『日本近代文学』第八三集、二〇一〇・十一)

付記

本稿は科研費基盤(C)の助成を受けた共同研究「脱ジャンル領域としての『小品』に関する動態的・文化史的総合研究」(課題番号: 26520153)の成果の一部である。

(やまざき よしみつ・秋田大学准教授)